



# 四鬼



川崎ゆきお

「季節の変わり目にはややこしいものが出る」

「ややこしいとは？」

「面倒なものだ」

「人ですか」

「ああ、季節の変わり目にはおかしい奴が出ると言われておるが、昔のことじゃ。今はそれほど季節感はない。四季の移ろいも昔とはちと違う」

「じゃ、そのややこしいものとはなんですか。何が出るのですか」

「気の精霊」

「はあ」

「気の悪霊と言ってもいい。気の精じゃ」

「精霊ですか」

「妖怪のようなものでもあるが、形はない。空気のようなものじゃな」

「季節の変わり目に、その気の精霊が出るのですね。それがややこしいと」

「ややこしい災いを与える。人にな」

「動物には？」

「それは知らぬ。動物は本能がしっかりしておる。自己防御のな。だから、ややこしいものを交わすことが出来る。まあ、そういうのに取り憑かれても動かず、じっとしておる。その判断がしっかりしておる。しかし、人はそうはいかん。欺される。その気の精にな」

「人を欺すような妖怪なのですか」

「それなら、昔から狐狸がおる。形がある。気の精にはそれがない」

「違いはそれだけですか」

「悪い風が吹く」

「はい。それは風邪ではないのですか。ウィルスとかバイ菌とか、そういったものでは」

「顕微鏡で見れば形があるだろう」

「あ、はい。それで、その悪い風とは」

「気配として分かる。今吹いておる風は普通の風ではなく、悪しき風じゃとな」

「寒いとか」

「生温かい場合もある。体の奥まで突き抜ける風じゃ」

「それは何でしょう」

「季節の変わり目になると、そういう、ややこしいものが出るのじゃ」

「何かの比喩ですか。季節の変わり目に体調を崩すとか、ありますよね。そのことではないのでしょうか」

「そうじゃない。気の精の仕業じゃ」

「それは、どんなややこしいことを人に成すのですか」

「人変わりしたり、妙な行動を起こしたり、妙なことをしでかしたりする」

「何かに取り憑かれていますか」

「本人が自発的にやっておる」

「でも、気の精がそれをやらせているのでしょ。ややこしいことを」

「気の精はきっかけを与えるだけ、スイッチじゃ」

「はあ」

「あとは、本人が勝手に振る舞う。そのため、それを抜く祈祷も効かぬ。霊落としもな」

「それは治るのでしょうか」

「ああ」

「治るんですね」

「そのうちな」

「ああ、よかった。それで、対処法は」

「ない」

「でもしばらくすれば治るのですね」

「そうじゃ。気が抜けるようにな」

「気が触れた状態に近いのですか」

「状態は人それぞれ、自発的なのでな」

「あ、はい。じゃ、それは精神的な疾患のようなものですか」

「先ほどから言ってるじゃないか、気の精が原因じゃ。本人は問題ない。まあ、気が病んでいるかどうかも分かりにくい」

「それは、季節の変わり目に起こるのですね」

「そうじゃ、古人はそれを鬼に引っ掛けて四鬼と呼んだ」

「鬼なんですね」

「精霊よりも使い回しがよい。それに鬼と言った方が分かりやすい」

「四季と鬼を掛けたわけですね」

「四季はまた、式とも呼ぶ」

「では、式神の」

「そのややこしい気の精は形なく、症状もまちまち。だから、しっかりとしたキャラにはならなかった」

「キャラですか」

「ああ、鬼や妖怪のようにはな。しかし、当てはめるものはある。それが気じゃ」

「空気の気ですね」

「気配の気」

「気合いの気ですね」

「気持ちの気じゃ」

「はい」

「それで、四季に現れる気の精の気分は分かったじゃろ」

「はい、何となく。しかし、それって、役に立ちます」

「立たない」

「あ」

了